

No.18 「循環型社会の価値観」

先日、ダイエーで牛肉の表示取替えによる返還騒ぎがマスコミを賑わした。代金返還に当たってのダイエー側の不手際もさることながら、驚いたのは販売額の5-6倍の返還申し出があったことである。なかにはインターネットで連絡を取り合っ

て買いもしないのに請求した若者が多くいたそうである。

正に、「赤信号みんなで渡れば、怖くない」というのであろうか。

かつて、安岡正篤は「政治不信をはじめとする社会の上層部の腐敗は一般市民の風俗への腐敗につながり、最後にはその社会の崩壊につながる」として、指導層の汚職腐敗を厳しく戒めたが、日本は崩壊時期に入っているのだろうか？

それとも、この問題はそれほど深刻に考えなくても、よいものだろうか。

18

落語家 志ん生の人情話に「柳田の堪忍袋」(柳田角之進) というがある。

この話は江戸時代の人情をあらわしていて興味深い。

「曲がったことの嫌いな浪人「柳田角之進」が碁を通じて知り合った質屋の主人「源兵衛」宅に出入りするようになる。

たまたま、二人が碁を打っている時に50両の金が紛失する。主人源兵衛は柳田を大変信頼しているが、番頭「徳兵衛」は角之進が盗んだものと疑い、役人に届けると言い出す。それを聞いた柳田は自分が盗んだものではないにもかかわらず、武士が「縄目の恥を受ける」のは、柳田の家名に傷をつけるものと切腹を決意する。

しかし、娘の「きぬ」が盗らないものなら、いつか必ず見つかるはずであるから自分を遊郭に売って「武士道を立てる」ように父「角之進」に申し出る。角之進は悩むが結局、娘「きぬ」の申し出を受け、「きぬ」の身請け金50両を番頭に渡すことにする。その時、万一その金が他所より、出た場合は主人と番頭の「首をとる」ことを約束させる。

その後、半年程して、質屋の大掃除の時にこの50両が壁にかけた額の裏から発見される。主人源兵衛がしまい忘れていたのだ。主人は自分の首がとられるのも承知のうえで、奉公人を総動員して柳田をさがさせるが、行方がわからない。

年が明けてたまたま新年のあいさつ回りをしていた番頭がぼったり柳田に出会う。柳田は番頭から50両が見つかったことを知らされ、約束通り二人の首をとりに行くが、主人源兵衛と番頭徳兵衛がお互いにかばい合いのを見て二人を許す。

二人は柳田に許しを乞うとともに柳田の娘を遊郭から身請けして自分の養女として引き取り、娘は番頭徳兵衛と結婚し、話はめでたしめでたしとなる。」

落語のあらすじを述べるのは野暮な話だが、名人志ん生の絶妙の話芸で江戸時代の人情が生き生きと語られている。

最近のカセットやCDで販売されているので、読者諸氏も一度鑑賞されることをお勧めする。

この話から当時の人々の価値観、人生観が察せられて面白い。

第一に角之進の武士としての「縄目の恥」を恥辱とする誇り高い生き方である。自分が盗んだわけではないにもかかわらず、役人に取調べを受けるだけで「先祖」に申し訳がないとして、自分の娘を遊郭に売ってまでそれを弁済する「武士道」である。現代人なら「馬鹿ではないか」と思うであろう。

第二に必ず他より発見されることを信じて自ら遊郭に身売りした「きぬ」の心意気である。

第三に金が発見されると、自分の首がとられることも承知の上で、奉公人を総動員してまで柳田を探させる質屋の主人「徳兵衛」の「清廉、潔さ」である。

第四に遊郭に身売りした娘を自分の養女として引き取る主人とその娘を嫁にする番頭のおおらかな心情である。

第五に社会システムとしての遊郭の存在である。人は長い人生のうちには、時にどうしても金があることがあるわけで、そんな時、死ななくても（自殺しなくても）、女は「遊郭」、男は「丁稚奉公？」など生きられる最低限の社会システムがあったことである。もちろん、この職業の女性の境遇は悲惨なものだったろうが、一面、花魁などはかなり高い社会的評価を受けていたようでもある。

第1、第2、第3のいずれも、「近代的合理的？」な現代人には「馬鹿げた行為」に見えるだろう。しかし、物質より人間としての精神や誇りを優先させる価値観は現代人が失ってしまったものではないだろうか？

第4、第5は現代でも「風俗産業？」とかが流行なので理解できるかもしれない。しかし、身売りする動機は大分違うように思うが、どんなものだろうか？

今、地球環境の危機を迎えて、危機を回避し、未来の「人類社会」を構築する

ためには、単に循環技術が開発されるだけでは不十分である。新しい循環技術を開発することは必要であるが、それだけで持続可能な循環型社会ができるわけではない。

重要なことは、その社会を構成する人々がどのような誇りと希望をもって日常生活を送るのか、また、その社会の青少年が将来どのような「精神をもった人間」(人格)を目標とするのか、がある程度想像できることである。

そうでない限り、技術的な側面からだけの「循環型社会」は単なる産業構造上の変革にすぎないものになるだろう。

また、そのような変革だけであれば、決してこの環境革命は持続しない。「循環型社会」を単に産業構造上の変革だけに終わらせるならば、皮肉なことにその社会は決して持続可能とはならないであろう。

未来の「人類社会」とは少なくともその社会に住む人々が生き生きとした活力と誇りをその日常生活にもちつづけられるものでなければならない。だとすれば、未来の地球的な視野に立った「人類社会」を構築することは、単に物質を人類社会のなかで循環させる「技術」だけでなく、そこに住む人々の「生きがい」や「希望」「誇り」「安心」など人々の人生に対する価値観の変革が重要なのではなからうか。なぜなら、本来「人は生きるために食うのであって、食うために生きるのではない。」からである。

もし、現代のように単に物質的に豊かになること（金持ちになる）が人々の主要な目的だとすれば、環境革命は成立しない。

古来、革命とは価値観の転換であり、それなくして社会構造上の変革はあり得ない。

したがって、環境革命を進めていくためにはその革命にふさわしい価値観を明確にしなければならない。

しかし、現在の国家主義や市場経済のもとで、この価値観をもって生活することはかなり難しい。

しかも、この新しい「循環型社会」の価値観を現在の我々はまだ確立しておらず、明確にはイメージできていないからである。

この価値観を把握していくためには、やはり人類が古来より築き上げてきた価値観や精神文化を「地球環境危機」という側面から改めて検証する必要があるだろう。

見方を変えれば、「循環型社会」を構築することは必然的に「精神的に高く、深い文化」を「持続可能」にすることである。

数世代後の孫子世代の「地球環境」を思いやることはかなり高度な精神が必要である。

自分の子孫に私的な財産を残すことは、誰もが考えることだが、自らの子孫を含めて、後世代全体（全生態系）の地球環境を配慮することはなかなか難しい。そのためには、空間的（地球規模の）広さと時間的（数十、数百年の）長い未来を考慮できる「視野」が必要になるだろう。

このような社会は人類が今まで到達したことがなかったものである。それ故に、この革命を遂行することは素晴らしい地球の未来への挑戦でもある。

過去の多くの革命は科学技術の進歩によって、人々の視野が拡大（価値観の転換）し、その所属する社会への「危機感」が醸成されることによって遂行されてきた。

現在起こっている地球環境問題は我々人類が地球的視野で考え、将来世代の生存に危機感を持つことを要求している。

「--豪壮な邸宅や華美な服装、豪華な食事が文明の高さではない、正義がいかに広く深く社会に行きわっているか--がその社会がいかに文明的であるかの指標である。」「我が家の家法―見孫のために美田を残さず。」―西郷隆盛
「物質的に豊かな社会を築くことの目的は、礼節を知る人間を作ることである。」
―上杉鷹山

「常に未来の七世代のことを考えて生きることである。たえずこう問いつづけることである自分の行動は自分の子どもの子ども、そのまた子どもにどんな影響を及ぼすのか。」

「北米の先住民族アベナギ族のジョゼフ・ブルチャック氏 インタープレスサービス 清水知久訳

不惜身命

（ふしゃくしんみょう）：法華経の譬喩品（ひゆぼん）の語。仏道のためには身命を惜しまないの意。これが武士の身命よりはる大義や誇りを大切にす武士道の精神につながった。江戸時代末期キリスト教宣教師をして日本には2種類の人種が

いるといわせた武士の生活態度であった。

このような思想は欧州の騎士、アメリカインディアンやアフリカマサイ族の戦士等の思想と同類のものである。物質文明はこれらの思想を人々の生活の中から追放してしまった。